

陝西省の農民(76歳)孫娘とともに。うしろに見えるのが「風水木」(お墓を守る)

# 中国の環境問題が示すもの

大阪外国語大学講師

深尾葉子

## 流れる大地の上で生きる人びと

昨年の夏から、中国陝西省北部、黄土高原地帯に足を運ぶことが多くなった。

陝西北部といえば、中国映画をご覧になったことがある方は、数年前に日本で公開された「黄色い大地」(陳凱歌監督)を思い出していただければよいだろう。画面いっぱいには広がった、褐色の大地と砂煙。そこに呑み込まれるようにして生きる人びと。かつて、外国人は通行許可証なしには入れなかったこの地域だが、現在は徐々に開放されつつあり、煩雑な手続きなしに入れるところが増えている。

「黄土高原」の最大の特徴は、標高千メートル前後の台地を黄土層が覆い、浸食

による谷が各所にけずられているという地形的な点にある。黄土高原そのものは、山西省、陝西省、甘肅省、寧夏回族自治区等に広がっており、陝西北部は、黄土高原全体の二〇%を占めている。

黄河が貫くこの高原は、黄河の水を黄色い濁流に染め、また春の日本に黄砂を降らせている地域でもある。

かつて、ここも森林や草原が覆っていたといわれているが、現在は、ごく一部の植林地区と、村の中を流れる川の両岸を除いて、木はほとんど見られない。写真を見ていただければわかるように、周囲を囲む山々には、「風水木」と呼ばれる祖先のお墓を守るとされる木が時折、山頂近くに生えているのみで、それ以外は

まったくのはげ山が続く。

これは、文明の生んだ景観といえる。

かつての首都、長安(現在の西安)の北三〇〇から五〇〇キロに位置する同地区は、古代は、少数民族の遊牧地区であったが周・秦代に至って、漢族による開墾が進み、その後、漢代から唐代へと破壊が緩慢に進む。明清期には、すでに土壌流出が深刻となり、今世紀初頭の民国期には、森林の喪失は決定的なものとなり、砂漠の南下も急速に進む状況となっていた……これが陝西北部黄土高原の「自然と人間の歴史」の経過である。

そして現在、数々の植林や、土壌定着化の試みにもかかわらず、同地域はきわめて深刻な表土流出に悩んでいる。比較



的安定した場所に位置する村の周辺は別としても、村と村を結ぶ道路や、村のはずれでは、晴れた日には黄砂が舞い上がり、雨が降れば土砂崩れ、という日常である。また、さらに印象深かったのは、そこで生きる人びとが、土砂が崩ればそこを耕し、表土がなくなれば、そこから石を掘りと、あたかもそうした営みこそが「自然」であるかのように、生活をしていることである。個人の力では抗しきれない大きな流れに、もはや逆らわずに生きるしかない、ということだろうか。

### はげ山の歴史

文明の歴史が古いところでは、緑が失われるという例は、しばしば指摘されている。そう考えると、中国のこの地域に緑が失われているのも、たんに例外ではないものとして理解され、また同時に、「文明」と「緑の喪失」との関係は不可避なのではないかとの、悲観論に陥ってしまう。中国における森林被覆面積の割合は、一二％であるが、この数字は中国の各地がさまざまな歴史的経過を経て、

森林を失ってきたことを物語るものである。陝西は、破壊の歴史の長い地域に属するが、四川や雲南などは、近代以降の破壊が著しい。日本とほぼ同面積の雲南は、その九〇％が山地であり、植物の成育に適した環境であるにもかかわらず、現在緑に覆われているのはわずか二〇％にすぎずである。その破壊の要因は、政治的・軍事的・地域の社会経済事情などさまざまであるが、同地域一帯が近百年来、非循環構造に陥っていたことは確かである。また、他の地域においても過去の歴史をさかのぼれば、戦乱（日中戦争を含む）や大躍進期の土法高炉（自力更生の理念に基づいて、農村の各地に設けられた小規模高炉。この高炉の使用のために、大量の森林が燃料として消費された）、文化大革命期の穀物生産偏重主義などといった、限定的な歴史要因につきあたることも多い。しかしさきの循環構造としてみるなら、やはりそれぞれの地域での、森とのつきあいがかが重要な要素となっていることを見逃してはならない。

しばしば指摘されることであるが、日本は山と海の間が狭く、川の流れも急であるために、水や森との「よい関係」を保とうとする作用が働いたといわれる。また、主として江戸期の領主的土地所有が、よい形で働いたともいわれる。日本の要因についてはここで論ずる能力はないが、少なくとも中国に関していえば、

山頂から村を見下ろす。黄土高原の住宅は窑洞と呼ばれる土と石でつくった住居、内部は「冬暖夏涼」といわれ、当地の風土に合っている。オンドルもある

状況はまさに逆であったといえる。

まず、山地と海との距離が一般に長い。川は周知のように、長い蛇行を繰り返し、海へと向かう。そこでは、氾濫と干ばつに備える「水利」は発達しても、そのことが、「治山」とは直接結びつきにくい。また、北方を中心に畑作地帯が広がり、水田が広がるのは主として南方の平野地帯。日本のように山あいには水田が広がるという光景はほとんど見ら

れない。畑作の場合、裏山に緑がなくなることが、すぐさま農業生産に影響を与えるということが比較的少ない。ここで、水源林としての森林の意味が大きく薄められることになるのである。

さらにこれに加えて、人びとの生活用水が主として地下水であるということがあげられる。これも、水源林としての山林の意味を薄めさせる要因である。吉良竜夫氏は、盆地の文化は「せせらぎの文

化」であるのに対して、平野の文化は「地下水の文化」であるとされ、両者の間に水との接し方の違いが存在することを指摘しておられるが、中国における漢族の文化は、まさにこの「平野の文化」であったといえそうである。

つまり、生存のための水への関心もつはら井戸に向けられ、地域全体の水循環構造へ向けられるチャンスを少なくさせたと考えられるからである。

居住条件を左右するのは、よい井戸を掘ることができるかどうかであり、周囲に緑があるかどうかではない。再び、中国映画を引き合いに出すなら、数年前に公開された「古井戸」(呉天明監督)に描かれていたのが、まさにその世界であった。そこで舞台となっていた山西省の貧しい山村では、人びとの生活環境や社会関係のカギを担っているのが「井戸」であり、村の人びとは「井戸」を掘るために時には命を投げ出し、生涯をかけるのである。そして、その村の背景は、やはり幾重にも重なるはげ山であり、人びとはそれを所与の条件としてとらえ、関心を示そうともしない。

中国において、森林の保存を難しくさせたもうひとつの歴史的要因に、「商品経済の発達」があげられる。商品経済について中国は、きわめて厚い歴史的背景を持っている。地理的広がりを背景に、また人口の増大を条件に、中国は商品経



済を早熟的に発達させ、そのなかに蓄積されたノウハウは、華僑などに受け継がれる形で世に知られるところとなっている。と同時に、山地を含む「土地の商品化」も極めて高度に発達していた。

中国では、封建制が、数百年あるいは千年以上にわたって続いたといわれるが、そのことは、ヨーロッパや日本のような領主的土地所有を基盤とした社会が続いていたことを示すものではない。中国における地主制は、先の商品化された土地所有を基盤に成り立っていたのであって、地主制そのものが、内部的には極めて流動的なものであった。

さらに、土地の権利も田畑であれば、所有権・耕作権、というように「田皮権」「田面権」「田底権」等に細分化し、山地であれば「山皮権」「山底権」というように、それぞれの所有者が錯綜し、入り組んでいた。すなわち、一定の地域といっても、その権利が細分化し、また契約も短期的なものが多いので、植林のような、長期的な作業が成り立ちにくいという背景があったのである。

さらに、山林資源という形でいうならば、中国（主として漢族）は自らのフロンティアを外部へ拡張していくことによって解決してきたので、限られた地理的空間の中で、循環を達成させながら、資源を自己調達していくというシステムがそれほど必要とされていなかった、とい



う点もあげられる。フロンティアがなくなりつつある今、中国は東南アジアなどを中心に、日本に次ぐ木材輸入国となっていることは、あまり知られていない。

こうして、極端に言えば中国全体がひとつの「非循環社会」として、今日に至っている、いえるのである。

例外がないわけではない。行けども行けどもはげ山の続く中国の景観で、時折緑ゆたかな場所に出会うことがある。そういうところでは、必ずといってよいほど、森を残したり、植林を行うことに功績のあった人物の存在に行き当たる。

たとえば、大躍進等の影響を他の村と同様に受けつつも、その後継となる人物が現れて、山に木を植えることを提唱し、緑が蘇ることになった、といった例や、百年以上前に植林を重視する知県（日本の市や郡に近い規模）がその場所を治め、それ以後植林を重視する風潮が地域に根づいた例、さらにそのことが、民謡や語りものの形をとって、受け継がれている、といった例に出会うのである。

こういった例は、拾い集めるほど稀にしか存在しない。それが、現在の中国のはげ山の景観を形作っているのである。その点、日本は幸運であった。裏山の森がなくなることが、すぐに生活や生存に関わる地形に恵まれ、また限られた地理的範囲が、ごく限られた時期を除いて拡

張的資源調達を不可能にしていた。

しかし、現在日本は大きな転換点にきている。拡張的資源調達に頼ることで、社会全体が「循環社会」的発想を失いつつある。いや、もう失ってしまったてあらずいぶん経っている。これまで、その痛みは主として自国の内部ではなく、国外と国外の人びとに押しつけられていた。しかし、そろそろ自らの内部での自己崩壊も近づいているのを感じる。

開発に、リゾットにと国土を切り刻んでいるツケはどれ程計り知れないものであろうか。開発の歴史では、先を行く隣りの中国の例が、その痛みの深さを示してくれているように思われる。

中国が、そして日本が、異なる背景を持つ他地域を視野に入れ、そこから歴史の教訓を読みとり、最良の選択を行っていくこと、それが、「現在」という時を担う我々に課せられた大きな課題だといえるだろう。

※なお、中国における生態的危機と、その問題点については、拙稿「中国における生態的危機と未来」（橋本満・深尾葉子編『現代中国の底流』行路社一九九〇所収）に概略的な紹介を試みた。御参照いただければ幸いである。また、本文中の「せせらぎの文化」「地下水の文化」については、吉良竜夫『地球環境のなかの琵琶湖』人文書院一九九〇を参照されたい。